

高知市方言の上昇遅れと下降早まり

高山 林太郎 (東京大学大学院)
takayama_rintaro@nifty.com

1. はじめに— “なまけ” について

中井幸比古 (1997) 『高知市方言アクセント小辞典』と同じ話者 (下原瑞恵氏) を調査し、同辞典に記されている音韻現象の詳細な記述を目指した。小辞典には「低起式の上昇の 1 拍遅れ」(例: ウ[サギ〜ウサ[ギ (兎), ア[ルイチュー〜アルイ[チュー (歩いとる)) と「下げ核の下降の 1 拍早まり」(例: [アカル]イ〜[アカル]ルイ (明), [キルま]い〜[キル]まい (着)) の現象が具体例として記述されている。これらの現象を下原氏は“なまけ” (造語) と呼び、古い世代の発音に対する若い世代の発音であり、自分にとってより楽な発音であって、使用頻度が高い発音であるとする。他方で、“なまけ” を起こさない発音は、古い世代の発音であり、使用頻度が低い自分も使用することはあり、特に強調を表す場合には選好して使用する発音であるとする (また逆に、“なまけ” を起こした発音を、強調を表す為に用いるケースも中にはある)。音韻現象としては「低起式の上昇の 1 拍遅れ」と「下げ核の下降の 1 拍早まり」は全くの別物であるが、話者の心内辞書という共時的な体系内において占める通時的な地位が同様であることから下原氏はこれらをいずれも“なまけ” と呼ぶのであって、これらの音韻現象の通時的な位置付けを“なまけ” という造語は示している。本稿では下原氏が“なまけ” であると確かに内省した現象だけを取り扱っている。

2. 低起式の上昇の 1 拍遅れについて

「低起式の上昇の 1 拍遅れ」については、モーラ音素を含む語について見ると「イッ[コ (一個), ア[ンキ〜アン[キ (暗記), ギョ[一ギ〜ギョー[ギ (行儀), サ[イショ〜サイ[ショ (最初)] のような上昇位置が下原氏にはありうる。「ア[ンキ, ギョ[一ギ, サ[イショ」も“なまけ” 以前の形として使うことがあるという点が小辞典の記述と一部異なる。また、「ア[ルイチュー〜アルイ[チュー (歩), ハ[イッチュー〜ハイッ[チュー (入), カ[カエチュー〜カカエ[チュー (抱)] のように「1 拍遅れ」の「拍」がモーラでなく音節または音節相当のものに該当するケースも少数ながら存在する (※小辞典には「カ[カエチュー〜カカ[エチュー」とあるが、その発音も可能であろうと考える)。モーラ数の多い複合語などの場合には複合語内部境界などにまで“なまけ” が進みうる点は小辞典の記述通りである。「低起式の上昇の 1 拍遅れ」については他に特に述べるべきことはない。

3. 下げ核の下降の 1 拍早まりについて

「下げ核の下降の 1 拍早まり」については、小辞典の記述より更に詳しいことが判明したので、本稿ではこの点を主に記述する。形容詞・情態副詞など (例: [アカル]イ〜[アカル]ルイ (明), (1) [カルガ]ルと〜[カル]ガルと (軽々), (2) [イジ]イジと〜[イ]ジイジと, (3) [オキ]たい〜[オキ]たい (置), (4) [キルま]い〜[キル]まい (着), (5) [キリ]ャー〜[キ]リャ) で

起こる現象であり、形容詞について規則的に起こる（4拍以上の高起式のn拍形容詞にHn-1型とHn-2型が併用され、5拍以上の低起式のn拍形容詞にLn-1型とLn-2型が併用され、Hn-2型やLn-2型が“なまけ”に当たる）ことは小辞典の記載通りであるからその点について本稿ではこれ以上は扱わないこととする。

そのほか、「順接」（高く入れば高く付き、低く入れば低く付く）の有核の機能語が「低接」（必ず低く付く）に変化すること（例：エ[一の]わ～エ[一の]わ（良；伝統的な形式体言「が」とは別に共通語的な形式体言「の」も使用され、変化を被ったと考えられる）、(6)[ニワの]わ～[ニワ]のわ（庭）、(7)[ニワよ]り～[ニワ]より、(8)[ニワこ]そ～[ニワ]こそ、(9)[ニワな]ら～[ニワ]なら、(10)[ニワま]で～[ニワ]まで、(11)[ニワら]ー～[ニワ]らー、(12)[ニワさ]え～[ニワ]さえ、(13)[ニワし]か～[ニワ]しか、(14)[ニワや]ら～[ニワ]やら、(15)[ニワな]り～[ニワ]なり、(16)[ニワで]も～[ニワ]でも、(17)[キルけ]んど～[キル]けんど（着）、(18)[キルま]で～[キル]まで、(19)[ザツな]ら～[ザツ]なら（雑）、(20)[ザツで]も～[ザツ]でも）も下原氏曰く“なまけ”であり、「下げ核の下降の1拍早まり」という大きな枠組みの中に取り込まれるものである。なお伝統的な形式体言「が」は「高接」（直前に下げ核があればそれを消去してでも高く付く）であり、例えば「[シ]ロイ（白）」に「[が]わ」が付くと「[シロイが]わ」となるもので、有核ではあるが順接ではないので「下げ核の下降の1拍早まり」は起こさない。以下では番号(1)～(20)を振った現象を個別に見ていく。

3.1. 「[カルガ]ルと～[カル]ガルと（軽々）」等について（情態副詞）

情態副詞であり、高山林太郎（2013）で扱った「*アカア[カ]と」の類に該当する。京都では平安末期の段階で早くも「*[ピ]カピカと」の類に合流済みであるが、周辺の中央式の方言ではそうではない。高知市では「*アカア[カ]と（平安末期相当）>*アカアカと（室町相当）>アカア[カ]と>アカアカと」のように、一旦下げ核の位置が3拍目に移動したあと2拍目に巻き戻ったと見られ（※東京や岡山市では「ア[カア]カと」であり、3拍目に移動したままになっている）、下原氏が2種類の形を内省するのは通時的変化の前後の形をそのまま記憶しているものと考えられる。語例：[アオア]オと～[アオ]アオと、[アカア]カと～[アカ]アカと、[クログ]ロと～[クロ]グロと、[シロジ]ロと～[シロ]ジロと、…。

3.2. 「[イジ]イジと～[イ]ジイジと」等について（情態副詞）

情態副詞であり、高山（2013）で扱った「*[ピ]カ[ピ]カと～*[ピ]カピカと」の類に該当する。高知市や周辺部の中央式の方言では通常形の異音としての2単位形「[ピ]カ[ピ]カと」が存在することを高山（2013）で述べたが、下原氏の場合、2単位形は強調形である。1単位形について考えると、「*[ピ]カピカと（平安末期相当）>*[ピカ]ピカと>[ピ]カピカと」のように、一旦下げ核の位置が2拍目に移動したあと1拍目に巻き戻ったと見られ（※東京では1拍目が無声化する環境においてのみ巻き戻らず、「ピ[カ]ピカと、[キ]ラキラと」であり、岡山市では一切巻き戻らず、「ピ[カ]ピカと、キ[ラ]キラと」である）、下原氏が2種類の形を内省するのは通時的変化の前後の形をそのまま記憶しているものと考えられる（※

なお上記で「*[ピカ]ピカと」が再構形になっているのは、この語例に関しては回答が得られなかった為であり、下原氏の記憶にあれば古形が回答されるが無ければ回答されず、下原氏は機械的に作り出した形としてこれらの形を回答している訳ではない。語例：[イジ]イジと～[イ]ジイジと，[イラ]イラと～[イ]ライラと，[ウカ]ウカと～[ウ]カウカと，[ウキ]ウキと～[ウ]キウキと，…。

3.3. 「[オキた]い～[オキ]たい（置）」等について（動詞文節）

上述した形容詞の規則と同じである。語例：[きた]い（着），[シた]い（為），[ミた]い（見），[きた]い（来），[オキた]い～[オキ]たい（置），[フミた]い～[フミ]たい（踏），[カキた]い～[カキ]たい（書），[ノミた]い～[ノミ]たい（飲），[オリた]い～[オリ]たい（居），[アケた]い～[アケ]たい（開），[カエた]い～[カエ]たい（変），[タテた]い～[タテ]たい（建），[ナゲた]い～[ナゲ]たい（投），[キザミた]い～[キザミ]たい（刻），[ツナギた]い～[ツナギ]たい（繫），[コガシた]い～[コガシ]たい（焦），[サワギた]い～[サワギ]たい（騒），ア[ルキた]い～ア[ルキ]たい（歩），ハ[イリた]い～ハ[イリ]たい（入），[シラセた]い～[シラセ]たい（知），[ハジメた]い～[ハジメ]たい（始），[アズケた]い～[アズケ]たい（預），[アツメた]い～[アツメ]たい（集），カ[カエた]い～カ[カエ]たい（抱）。

3.4. 「[キルま]い～[キル]まい（着）」等について（動詞文節）

形容詞の規則とほぼ同じであり、n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが、低起式でも4拍語から変化が起きている。語例：[キルま]い～[キル]まい，[スルま]い～[スル]まい，ミ[ルま]い～ミ[ル]まい，ク[ルま]い～ク[ル]まい，[オクま]い～[オク]まい，[フムま]い～[フム]まい，カ[クま]い～カ[ク]まい，ノ[ムま]い～ノ[ム]まい，[オルま]い～[オル]まい，[アケルま]い～[アケル]まい，[カエルま]い～[カエル]まい，[タ]テルまい，[ナ]ゲルまい，[キザムま]い～[キザム]まい，[ツナグま]い～[ツナグ]まい，[コ]ガスまい，[サ]ワグまい，ア[ルクま]い～ア[ルク]まい，ハ[イルま]い～ハ[イル]まい，[シラセルま]い～[シラセル]まい，[ハジメルま]い～[ハジメル]まい，[アズ]ケルまい，[アツ]メルまい，カ[カエルま]い～カ[カエル]まい。

3.5. 「[キリャ]ー～[キ]リャ（着）」等について（動詞）

n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こり、その際に長音が消滅する場合がある。語例：[キリャ]ー～[キ]リャ，[スリャ]ー～[ス]リャ，ミ[リャ]ー～[ミ]リャ（※低起式が高起式に変わるケースもある），ク[リャ]ー～[ク]リャ，[オキャ]ー～[オ]キャ，[フミャ]ー～[フ]ミャ，カ[キャ]ー，ノ[ミャ]ー，[オリャ]ー～[オ]リャ(ー)，[アケリャ]ー～[アケ]リャー，[カエリャ]ー～[カエ]リャ(ー)，[タ]テリャー～タ[テ]リャ（※類推変化と見られる），[ナ]ゲリャー～ナ[ゲ]リャ，[キザミャ]ー～[キザ]ミャ(ー)，[ツナギャ]ー～[ツナ]ギャ，[コガシャ]ー～[コガ]シャ(ー)～[コ]ガシャ(ー)，[サ]ワギャー～[サ]ワギャ，ア[ルキャ]ー～ア[ル]キャ，ハ[イリャ]ー～ハ[イ]リャ，[シラセリャ]ー～[シラセ]リャ(ー)～[シラ]セリャ(ー)，[ハジメリャ]ー～[ハジメ]リャ(ー)～[ハジ]メリャ，[アズケリャ]ー～[アズケ]リャ～[アズ]ケリャ(ー)～[ア]ズケリ

ヤー, [アツメリヤ]ー～[アツメ]リヤ(ー)～[アツ]メリヤ(ー)～[ア]ツメリヤ(ー), カ[カエリヤ]ー～カ[カエ]リヤ(ー)～カ[カ]エリヤ(ー)。

3.6. 「[ニワの]わ～[ニワ]のわ (庭)」等について (名詞文節)

形容詞の規則と同じであり, n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こる。語例: [血の]わ, [巢の]わ, [名]のわ, [歯]のわ, 手[の]わ, 目[の]わ, [ニワの]わ～[ニワ]のわ (庭), [ミゾの]わ～[ミゾ]のわ (溝), [ゴマの]わ～[ゴマ]のわ (胡麻), [ヤ]マのわ (山), [イ]シのわ (石), ハ[リ]のわ (針), ア[メ]のわ～ア[メ]のわ (雨), [コトリ]のわ～[コトリ]のわ (小鳥), [トコロ]のわ～[トコロ]のわ (所), [チ]カラのわ (力), [イ]ノチのわ (命), [ア]サヒのわ (朝日), [アタ]マのわ (頭), [ムス]メのわ (娘), ツ[バ]キのわ (椿), ク[ス]リ_リのわ (薬), ス[ズ]メのわ～ス[ズメ]のわ (雀)。

3.7. 「[ニワよ]り～[ニワ]より (庭)」等について (名詞文節)

形容詞の規則とほぼ同じであり, n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが, 3 拍文節から変化が起きている。語例: [血よ]り～[血]より, [巢よ]り～[巢]より, [名よ]り～[名]より, [歯よ]り～[歯]より, 手[よ]り, 目[よ]り, [ニワよ]り～[ニワ]より, [ミゾよ]り～[ミゾ]より, [ゴマよ]り～[ゴマ]より, [ヤ]マより, [イ]シより, ハ[リよ]り～ハ[リ]より, ア[メよ]り～ア[メ]より, [コトリよ]り～[コトリ]より, [トコロよ]り～[トコロ]より, [チ]カラより, [イ]ノチより, [ア]サヒより, [アタ]マより, [ムス]メより, ツ[バ]キより, ク[ス]リより, ス[ズ]メよ]り～ス[ズメ]より。

3.8. 「[ニワこ]そ～[ニワ]こそ (庭)」等について (名詞文節)

規則は同上。語例も同上(「より」を「こそ」に変えただけ)。

3.9. 「[ニワな]ら～[ニワ]なら (庭)」等について (名詞文節)

規則は同上。語例: [血な]ら～[血]なら, [巢な]ら～[巢]なら, [名]なら, [歯]なら, 手(一)[な]ら, 目(一)[な]ら, [ニワな]ら～[ニワ]なら, [ミゾな]ら～[ミゾ]なら, [ゴマな]ら～[ゴマ]なら, [ヤ]マなら, [イ]シなら, ハ[リな]ら～ハ[リ]なら, ア[メな]ら～ア[メ]なら, [コトリな]ら～[コトリ]なら, [トコロな]ら～[トコロ]なら, [チ]カラなら, [イ]ノチなら, [ア]サヒなら, [アタ]マなら, [ムス]メなら, ツ[バ]キなら, ク[ス]リなら, ス[ズ]メな]ら～ス[ズメ]なら。

3.10. 「[ニワま]で～[ニワ]まで (庭)」等について (名詞文節)

形容詞の規則とほぼ同じであり, n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが, 低起式でも 4 拍文節から変化が起きている。語例: [血]まで, [巢]まで, [名]まで, [歯]まで, 手(一)[ま]で, 目(一)[ま]で, [ニワま]で～[ニワ]まで, [ミゾま]で～[ミゾ]まで, [ゴマま]で～[ゴマ]まで, [ヤ]マまで, [イ]シまで, ハ[りま]で～ハ[り]まで, ア[メま]で～ア[メ]まで, [コトリま]で～[コトリ]まで, [トコロま]で～[トコロ]まで, [チ]カラまで, [イ]ノチまで, [ア]サヒまで, [アタ]マまで, [ムス]メまで, ツ[バ]キまで, ク[ス]リまで, ス[ズ]メま]で～ス[ズメ]ま

で。

3.11. 「[ニワら]ー～[ニワ]らー（庭）」等について（名詞文節）

「らー」は「なんか・たち」の意である。形容詞の規則とほぼ同じであり、n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが、3 拍文節から変化が起きている。語例：[血ら]ー～[血]らー，[巢ら]ー～[巢]らー，[名ら]ー～[名]らー，[齒ら]ー～[齒]らー，手(一)[ら]ー，目(一)[ら]ー，[ニワら]ー～[ニワ]らー，[ミゾら]ー～[ミゾ]らー，[ゴマら]ー～[ゴマ]らー，[ヤ]まらー，[イ]しらー，ハ[リら]ー～ハ[リ]らー，ア[メラ]ー～ア[メ]らー，[コトリら]ー～[コトリ]らー，[トコロら]ー～[トコロ]らー，[チ]カラらー，[イ]ノチらー，[ア]サヒらー，[アタ]まらー，[ムス]メラー，ツ[バ]キラー，ク[ス]リらー，ス[ズメラ]ー～ス[ズメ]らー。

3.12. 「[ニワさ]え～[ニワ]さえ（庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例も同上（「らー」を「さえ」に変えただけ）。

3.13. 「[ニワし]か～[ニワ]しか（庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例：[血し]か～[血]しか，[巢し]か～[巢]しか，[名]しか，[齒]しか，手(一)[し]か，目(一)[し]か，[ニワし]か～[ニワ]しか，[ミゾし]か～[ミゾ]しか，[ゴマし]か～[ゴマ]しか，[ヤ]ましか，[イ]ししか，ハ[リし]か～ハ[リ]しか，ア[メし]か～ア[メ]しか，[コトリし]か～[コトリ]しか，[トコロし]か～[トコロ]しか，[チ]カラしか，[イ]ノチしか，[ア]サヒしか，[アタ]ましか，[ムス]メしか，ツ[バ]キシか，ク[ス]リしか，ス[ズメし]か～ス[ズメ]しか。

3.14. 「[ニワや]ら～[ニワ]やら（庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例も同上（「しか」を「やら」に変えただけ）。

3.15. 「[ニワな]り～[ニワ]なり（庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例：[血な]り～[血]なり，[巢な]り～[巢]なり，[名な]り～[名]なり，[齒な]り～[齒]なり，手(一)[な]り，目(一)[な]り，[ニワな]り～[ニワ]なり，[ミゾな]り～[ミゾ]なり，[ゴマな]り～[ゴマ]なり，[ヤ]まなり，[イ]しなり，ハ[リな]り～ハ[リ]なり，ア[メな]り～ア[メ]なり，[コトリな]り～[コトリ]なり，[トコロな]り～[トコロ]なり，[チ]カラなり，[イ]ノチなり，[ア]サヒなり，[アタ]まなり，[ムス]メなり，ツ[バ]キシなり，ク[ス]リなり，ス[ズメな]り～ス[ズメ]なり。

3.16. 「[ニワで]も～[ニワ]でも（庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例も同上（「なり」を「でも」に変えただけ）。

3.17. 「[キルけ]んど～[キル]けんど（着）」等について（動詞文節）

n-2 拍目に下げ核がある場合に変化が起こる。語例：[キルけ]んど～[キル]けんど，[スルけ]んど～[スル]けんど，ミ[ルけ]んど～ミ[ル]けんど，ク[ルけ]んど～ク[ル]けんど，[オクけ]んど～[オク]けんど，[フムけ]んど～[フム]けんど，カ[クけ]んど～カ[ク]けんど，ノ[ムけ]んど～ノ[ム]けんど，[オルけ]んど，[アケルけ]んど～[アケル]けんど，[カエルけ]んど～

[カエル]けんど, [タ]テルけんど, [ナ]ゲルけんど, [キザム]けんど~[キザム]けんど, [ツナグ]けんど~[ツナグ]けんど, [コ]ガスけんど, [サ]ワグけんど, ア[ルク]けんど~ア[ルク]けんど, ハ[イル]けんど~ハ[イル]けんど, [シラセル]けんど~[シラセル]けんど, [ハジメル]けんど~[ハジメル]けんど, [アズ]ケルけんど, [アツ]メルけんど, カ[カエル]けんど~カ[カエル]けんど。

3.18. 「[キル]まで~[キル]まで (着)」等について (動詞文節)

形容詞の規則とほぼ同じであり, n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが, 低起式でも 4 拍文節から変化が起きている。語例は同上 (「けんど」を「まで」に変えただけ)。

3.19. 「[ザツ]なら~[ザツ]なら (雑)」等について (形容動詞文節)

規則は同上。語例: [ザツ]なら~[ザツ]なら (雑), [ス]キなら (好), イ[キ]なら~イ[キ]なら (粹), ウ[ブ]なら~ウ[ブ]なら (初), [イビツ]なら~[イビツ]なら (歪), [コマカ]なら~[コマカ]なら~[コマカ]なら (細), [オ]ロカなら (愚), ガ[サツ]なら~ガ[サツ]なら, ア[コ]ギなら (阿漕)。

3.20. 「[ザツ]でも~[ザツ]でも (雑)」等について (形容動詞文節)

規則は同上。語例: [ザツ]でも~[ザツ]でも, [ス]キでも, イ[キ]でも, ウ[ブ]でも~ウ[ブ]でも, [イビツ]でも~[イビツ]でも, [コマカ]でも, [オ]ロカでも, ガ[サツ]でも~ガ[サツ]でも, ア[コ]ギでも。

4. おわりに

3 節で見たように, (1) 名詞文節・動詞文節・形容詞・形容動詞文節・情態副詞という幅広い内容語において「下げ核の下降の 1 拍早まり」が観察されること, また, (2) だいたい形容詞に見られるのと同じような「下げ核の下降の 1 拍早まり」が, 元が順接の有核の機能語において各所で見られ, その結果として新しい発音においては低接に変化していること, の 2 点が分かった。(2) は高知市方言の機能語を扱う上で注意すべき点である。

参考文献

- 高山林太郎 (2013) 「日本語諸方言の四モーラ畳語を比較する試み」『東京大学言語学論集』 34, 143-183. 東京: 東京大学言語学研究室
- 中井幸比古 (1997) 『高知市方言アクセント小辞典』神戸: 私家版
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』東京: 勉誠出版